

<報告>

フルートにおける新しい表現—「演じる音楽」の可能性 New Possibility of Flute Based on “Action Music”

川島 素晴

KAWASHIMA Motoharu

筆者は、2020年9月17日に自身の作曲作品による個展演奏会を「川島素晴 works vol.4 by 木ノ脇道元」と題して開催した。木ノ脇道元は、筆者が大学時代に2学年先輩として出会って以来、木ノ脇のプロデュースによる作品個展を2回（1996年、1999年）も開催して頂いた他、Ensemble Contemporary *a* というアンサンブル団体での活動など、様々な協働を重ね、その中でフルートの新しい表現を常に開拓してきた。1990年代における2回の個展での演目その他を回顧することで、我々が探求してきた現代フルート奏法の可能性を俯瞰しつつ、新作《木道》では、これまでにない新しい表現の可能性を示した。この演奏会で上演された旧作をはじめとする筆者のフルート作品とそこで扱われた様々な奏法を概観し、ここで発表された新作について詳述する。

キーワード：フルート、特殊奏法、演じる音楽、作曲、テルミン

1. フルート作品の概観

ここではまず、これまでに筆者が作曲してきたフルート作品について概観し、それぞれの作品において奏法上、どのような取り組みを行ってきたのかを述べる。（従って、作品の内容についての記述は最低限に抑え、奏法や木ノ脇道元との関係に限定した記述となっている。）ここで取り扱うのは、最大7重奏までの室内楽作品の内、フルートの扱いについて特筆すべき点のある作品に限るものとし、小品、編曲、その他、ここで扱うべき事項のない作品については割愛している。

なお、木ノ脇道元による川島素晴作品個展が1996年（「Dogen Features 川島素晴」、日暮里サニーホール）、1999年（<東京の夏>音楽祭「木ノ脇道元フルート・パフォーマンス」、津田ホール）に開催されている。また、研究課題である2020年9月17日の「川島素晴 works vol.4 by 木ノ脇道元」⁽¹⁾での上演曲目も含まれるため、それらの上演歴については各項の末尾に（1996上演）（1999、2020上演）のように付記した。

（1）《Manic Psychosis I》（1991-92）

筆者が大学1年の冬休みに作曲し、秋吉台国際作曲賞に応募して受賞、ベーレンライター社から出版された、いわば出世作。全体が無窮動であることを途切れ

なく実現するために、通常の音、ブレスノイズ、キーノイズのみの音を移行することで、息継ぎをしている状態でも常に発音を継続させている。重音、トランペット・アンブシャー、最高音域の拡張、吸気による発声、ホイッスルトーンなど、当時はまだ開発されて間もない様々な奏法を盛り込んだ。カリン・レヴァイン（Carin Levine）により初演され、その後、ISCMをはじめ国際的に多くの上演がなされている他、神戸国際フルートコンクール等の課題曲として指定される等、筆者の窺い知らない場所でも頻繁に上演されているが、その中であって最も上演機会の多い演奏家の一人が木ノ脇道元であり、レヴァインに継いで国内でCD録音を果たしている。（1996、2020上演）

（2）《夢の構造 IIb》（1994）

「曙」というアンサンブル団体の委嘱により、バス、通常管、ピッコロの3種を持ち替えるフルートと、トロンボーン、打楽器奏者2名による4重奏作品として作曲した《夢の構造 IIa》を、その同年の秋吉台国際作曲セミナー&フェスティバルの委嘱によりフルートとトロンボーンの2重奏作品に改変したもの。楽曲の基本構造は同じだが、この改変に伴い、打楽器奏者が担っていたリズム構造をも2名が示す必要があること、また、前作では即興的に演奏していた部分を2重

奏にするに際して確定譜にすることにより、最高難度の2重奏作品となった。本項(1)ではフルート独奏による可能性を探求したが、ここでは3種のフルートを持ち替えていくことで、作品の各部に即した様々な表現の可能性を探求している。筆者が最も「新しい複雑性」と呼ばれる潮流に影響を受けていた時期の作品で、これまでに書いた中でも最も複雑な楽譜となっている。(1996、2020上演)

(3) 《ポリプロソポス I》(1996)

木ノ脇道元とピアニストのデュオのための委嘱作品として作曲した、独奏的立場のフルートに、クラリネット、マリмба、ピアノが加わる4重奏作品。ここでもフルートはピッコロ、通常管、バスを持ち替えるが、ここでの持ち替えは、「演じる音楽」⁽²⁾における3つの構造視点を提示するトリガーであり、前作が時間構造の分節であったことに比して、いっそう、新しい音楽構造と合致したものとなる。ピッコロは通常奏法の素早いパッセージのみ、フルートは様々な特殊奏法を用いてリズム構造を提示、バス・フルートは様々な特殊な演奏姿勢を用いて演奏行為による構造を提示していき、それぞれ他の楽器は、同期するホモフォニックな関係、リズムの対位的な関係、身体的にヘテロフォニックな関係を示していく。それらの構造視点の転換が徐々に切迫すると、構造視点そのものが攪拌され、最後には統合される。具体的には、ピッコロは左手のみで持ち、右手にはフルートの頭部管のみを持つことで交互にそれらを吹き、さらに、台に載せたバス・フルートのキーを叩くことでリズムを示す、といった具合に全ての楽器を同時に演奏する状態に至る。(1)(2)とともに連続上演することにより《Brain Flute Cycle》と称する一作品とみなす構想があったが、長らく実現してこなかった。2020年にはこの形で初の上演が叶った。(1996、2020上演)

(4) 《Manic Psychosis II》(1996)

(1)の続編であるかのようだが、内容は著しく異なっている。共通するのは、無窮動的な作品である点のみで、ピッコロ独奏で様々な音型を提示していく。そしてそれらの音型の転換が2巡目以後、徐々に切迫していく。特殊奏法はほとんど登場しないが、ピッコロの運指や運舌のテクニックの様々な探求がなされている。ピッコロ独奏による現代作品には珍しいものが多いが、この曲はその中でも最たる例であろう。1996年の個展に際して木ノ脇道元の委嘱により作曲。

(1996、1999上演)

(5) 《スケルツォ》(1997)

足立智美がディレクションする、ベートーヴェン《交響曲第9番》の現代的なリダクション企画があり、その委嘱で作曲。筆者が担当したのは第2楽章「スケルツォ」であった。ここでベートーヴェンが実践した、オクターヴ調律のティンパニによるオクターヴ主題の提示は、それがニ短調の第3音であることも相まって、当時、極めて斬新なものとして映じたはずだ。その衝撃に匹敵するには何をなすべきか。私なりの回答として、ピッコロとフルートを瞬時に持ち替えることにより、この主題を提示することとした。(相手の打楽器奏者には、あらゆる楽器において、オクターヴのコンビネーションを準備してもらった。)瞬時の持ち替えを実行するために、フルートをスタンドに取り付け、片手で演奏できるようになっており、そしてピッコロは首から紐で下げておく。時には、左手でピッコロを持ち、右手でフルートの運指をする(通常なら左手で押さえなければならない穴に右手を置く場合もある)という、離れ業が求められる。木ノ脇道元と神田佳子により初演。(1999、2020上演)

(6) 《パリで1998 — 記憶と縁》(1998)

ダンサー、フルーティスト、ピアニストの3名による舞台作品として委嘱を受け、作曲。舞台全体は1時間半に及ぶ内容で、20世紀初頭のパリにおける様々な登場人物を表象し、フルーティストもピアニストも衣装を着替え、役を何役もこなしながら(多くの場合暗譜で、舞台を動き回りながら)演奏しなければならなかった。木ノ脇道元と筆者により初演したが、彼との一連の協働の中でもある意味では最も濃密なものとなった。ライブでの上演の他、プリベアド・ピアノとアルト・フルートによる2重奏曲を予め録音しておき、それをテーマ曲とし、《エスキス》と題した。(全てのキャラクターの融合した状態として構想されている。ピアニストは打楽器も持ち替える。また、フルートはピッコロ、通常管、バスを持ち替える。これらの折衷的な演奏が可能な形態として、プリベアド・ピアノとアルト・フルートが選ばれている。)その《エスキス》はその後も何度か上演してきたが、全体の日本初演は叶っていない。そこで、2020年の個展に際して組曲版を編み、フルーティストとピアニストのデュオ作品として上演した。(《エスキス》1999、《組曲版》2020上演)

(7) 《フルート協奏曲 (cond.act/konTakt/conte-raste II)》(1999)

ハノーファー・ビエンナーレの委嘱によりアンサンブル・ケルンのために作曲。題名の()内に示されるのは英独仏語による造語で、それらが示唆する複合的な意味が、このアイデアの様子を表している。演技を伴う指揮者である「cond.actor」が、5重奏のアンサンブルによって複雑な変拍子による現代的な音楽を演奏していると、フルーティストがモーツァルトの断片を吹いて介入する。丁々発止の奪い合いの果て、二人だけのカデンツァでは、cond.actorの示す内容に従って様々な奏法で各種楽想を吹いていく。しかしやがて、フルートの反撃を経て形勢逆転、cond.actorは自動人形のように発声しつつ反復し、それを尻目にフルーティストがアンサンブルを引き連れて去ってしまう。といった展開による、ストーリーの明確な内容となっているが、ここで行われている様々なギミックは実際に上演するのは極めて困難であり、最高難度の演奏が求められる。世界初演の後すぐに日本初演したのが、木ノ脇道元による1999年の個展である。その後様々な演奏機会があったが、2020年の演奏は木ノ脇道元と筆者による21年ぶりの上演となった。(1999、2020上演)

(8) 《視覚リズム法 II》(1996/99)

1996年の個展に際して木ノ脇道元から委嘱を受けて作曲しかけていたが、その時は完成せずに、1999年の個展に際して完成。筆者のパフォーマンス作品の中でも演奏機会の多い(またメディアでの紹介機会も多い)《視覚リズム法 Ia》は、テーブル一つを両手両足で演奏する作品だが、そこで実行したポリリズム的な構造の「視覚と聴覚の齟齬」を伴う提示を、本作ではアルト・フルート独奏という形で実践している。キーノイズのみによりポリリズム的な構造が示されると目が回って寄り目になる、予め水を含んでおいて突然うがいをする、頭部管をはずしてトランペット・アンブシャーを行った直後にまた戻すという往復の果てに頭部管(予め仕込まれたダミー)が落ちてしまう、そしてその頭部管がなぜか上手側にズルズルと引き摺られて移動していく、等の様々なギミックが次々と展開する。筆者が作曲した作品にはナンセンスな内容のものも多いが、この作品はその最たるものである。(1999、2020上演)

(9) 《Manic Psychosis III》(2003)

ピッコロ、ピッコロ・トランペット、クラリネッ

ト、バスーンの4重奏曲。とあるグループ展の出品作として作曲し、Ensemble Contemporary aのメンバーにより初演。その後、同団体の定期演奏会でも同じメンバーにより上演されたが、そのときのメンバーに、木ノ脇道元も含まれている。無窮動であるという点では(1)と共通するが、ピッコロ・ソロ作品である(4)の延長として構想されている。最初、ピッコロがソロで楽想を次々と提示。次いでピッコロ・トランペットもソロで、クラリネット、バスーンもソロでまずは提示していく。2巡目以後、同じ楽想が切迫していくのだが、他の楽器が徐々に重なっていく。それぞれの楽器はそれぞれの得意な楽想を提示していたので、段々重なるにつれ、他の楽器がその難しい楽想に付き合わねばならない。最終的には4重奏が一斉にシンクロして、これらの楽想を瞬時に転換しながら演奏していく。この仕立てをさらに、譜面台を横一列に並べ、同じ譜面台を各奏者が見ていくことで、段々と重なっていく様子が一目瞭然となるようになっている。

なお、この3年後に《Manic Psychosis IV》をニューヨークで初演したが、これは、本作をベースに、ピッコロ、ヴァイオリン、オーボエ、トランペット、アルト・サクソフォン、ホルン、バスーンの7重奏作品にしたものであり、基本的な内容は同一である。しかし、最後に、即興的なシーンとなり、全員が舞台全体を動き回る展開が加わることで、より一層、激しい作品になった。(2020上演)

(10) 《フルートとハーブのためのエチュード「八丈三題」》(2004)

千葉純子の委嘱により八丈島にて初演。八丈島に初めてハーブが運び込まれる機会に作曲するという、稀有な体験となった。「黄八丈」では、織り機の様子をフルートのプレスノイズとピツィカートにより表現。「あしたば」では上行音型の絡み合い。「ストレリチア」ではジェットホイッスルや倍音奏法を中心としたフルートと、プリパレーションを施したハーブのアンサンブル。といった具合に、八丈島にちなむ3つの題材を、各種奏法で表現している。

(11) 《フルートソロのためのエチュード「沼宮内伝説」》(2006)

千葉純子の委嘱により沼宮内の学校演奏にて初演。岩手県の沼宮内に伝わる大蛇伝説に基づく内容のフルートソロ作品。カバー・アンブシャーによるフラッター奏法は大蛇の雰囲気を表すのに適しており、人身

御供の娘が唱えた経文をハーモニクスで奏でると、やがて大蛇の姿が消え成仏するという流れを、特殊奏法を駆使して表現した。学校演奏演目としては大胆な内容だったものの理解を得られたようである。その後も複数の演奏機会を得ている。

(12) 《マハリンバ》(2007)

マリンビスト片岡綾乃からのフルートとマリンバのデュオ作品をとの委嘱に応じて作曲。マリンバの周囲を、マリンビストのみならず、フルーティストも走り回りながら演奏しなければならない。(3)ではピッコロを吹きながら走り回るシーンがあるし、(6)でもしばしば舞台を動き回る。(9)の後半に記述した《Manic Psychosis IV》も最後は皆で走り回る。このように、演奏しながら動き回る指示はしばしば行ってきたが、ここでのそれは、ひっきりなしに動いている必要があるという意味で、これまでに無い過酷さがある。

(13) 《棒縛》(2011)

木ノ脇道元の後継者たる存在、多久潤一郎率いるフルートトリオ、「マグナムトリオ」と協働したコンサートを開催し、そのときに初演した。狂言の「棒縛」は、留守中に酒を盗み呑む召使いたちに手を焼いた主人が出かける際に、一人は両手を棒に縛り、一人は後ろ手に縛るも、召使いはその状態でも工夫して結局酒を呑んでしまうという話。本作では、バス・フルートで両手が縛られている状態、フルートで後ろ手に縛られている状態、という具合に3名の奏者がそれぞれ異なる状態で拘束されている中、どうにか工夫して、3名ともお互いにお互いの楽器を演奏していく、という異様な上演が実行された。ここでのこうした実践は、2022年に本個展シリーズの次の回にて初演予定の《ROSCO Chapel》の中で、木ノ脇道元、多久潤一郎を含む4名のフルーティストにより、さらに拡張した状態で実践する予定である。

2. 新作《木道》について

(1) 経緯

以上に述べてきたように、筆者はこれまで、ありとあらゆるフルート奏法、あるいはフルートをとりまく様々な表現方法を実践してきた。いわば、フルート奏法の可能性を汲み尽くしてきたと言っても過言ではないと自負している。その上でなお、新しい可能性を探求するということも、全く可能性がないわけではな

い。そう言えば筆者は、まだコントラバス・フルートや、ダブルコントラバス・フルートのような超低音の楽器を用いた作曲はしていない。しかしそれとて、今世紀に入ってから様々な作曲家や演奏家がそれぞれに探求してきたことまで網羅的に参照するなら、もはややり残したことなどないのではなかろうか。そもそも、そうした奏法上の開発競争にいくばくかの上書きをすることが、果たして今世紀の仕事として相応しいものであろうか。2020年の個展で上演した演目は、ほとんどが20世紀のうちに作曲されたものである。木ノ脇道元との協働はしばらく途絶えていたが、そうやって21世紀が20年も経過してみても思うのは、単なる開発競争への上書きではない可能性への探求こそが、今、なすべきことなのではないか、ということである。

そのような思いを抱いていたところ、2019年9月20日、国立音楽大学楽器学資料館が主催するイベント「テルミン発明100周年 特別ワークショップ ～テルミン家三世代と竹内正実先生をお迎えして～」が開催された。このとき、テルミン家三世代の前で、本学作曲専修学生、及びコンピュータ音楽専修学生が事前にテルミンを練習し、自作自演を行うという試みもなされた。学生2名は、楽器学資料館所蔵のテルミンを利用して数ヶ月間練習を重ね、しっかりと大役を果たした。筆者自身、かねてより楽器学資料館に置かれていたテルミンを何度か試奏した経験もあったが、この機会に、テルミンという楽器への親近感がさらに増したことは確かである。

その後、2020年3月2日、NHK Eテレの「沼にハマってきいてみた」という番組で「激レア楽器」の特集が行われ、筆者はアドバイザーとして出演、企画段階から参加した。「激レア楽器沼にハマった若者代表」として、テルミンを学んで自作自演を行った作曲専修学生を紹介し、楽器学資料館所蔵の楽器を借用して番組収録を行った。その学生は番組内で、自作自演でテルミン作品を披露したのである。

こうした経緯を経て、筆者自身のテルミンという楽器への思いはより強くなっていった。そしてあるとき、フルーティストがテルミンを同時演奏する作品が実行できるのではないか、という思いに至る。周知の通り、テルミンは、楽器に直接手を触れずに演奏が可能なものである。右手側で音程を、左手側で音量をコントロールするのだが、フルートを構えた状態のままでも、そのようなコントロールが可能ははずだ。(これがクラリネット等の縦長の楽器だとうまくいかない。つまり、フルートという楽器は、このアイデアを

実行するにはうってつけの楽器なのである。そしてこれにも関わらず、これまでに、このような設定で演奏を行っている事例は、存在していない。

(2) アイデアのルーツ

もちろん、そのことを夢想した3月の段階から、半年後のコンサートまでの間に、テルミンの専門家のように繊細な音程や音量をコントロールしつつ、且つフルートを同時演奏するような内容は実行できなからう。そこで思い至ったのは、筆者自身の作品、《孤島のヴァイオリン》(1991)のようなアイデアを適用するということである。

《孤島のヴァイオリン》は、無人島で初めてヴァイオリンを見つけた人が、それを見てどのような演奏を行うであろうか、というシミュレーション作品である。まずは拾い上げて眺め、あちこち叩いてみる。そして抱え持ってパーカッションとしての演奏を探求し、最後には親指ピアノのように演奏しながら息絶える、といった流れを持つ。ここでは、ヴァイオリンの伝統的な演奏技法は一切用いられない。(この系譜には《孤島のチェロ》(2009)もあり、こちらは、2時間のコンサート全体を貫いてこのコンセプトを実行していく壮大な作品である。)

新作《木道》での実践は、テルミンという、特殊な発音原理をもった物体に初めて接した人物(ただし、なぜかこの人物はフルートを達者に演奏できる)が、それをどのように扱うか、というシミュレーションである。

このように構想を固めた時点で木ノ脇道元に了承を得て、自らテルミン(ならびにフルート)を購入して創作に入った。

(3) 作品解題

ここで、本作の内容について概要を記していく。

なお、以下の記述は、YouTubeに公開している初演動画⁽³⁾のタイムに基づいて行われる。

0:30) 奏者、舞台中央のテルミンに歩み寄り、様子を窺う。スイッチを入れ、つまみを触ってみる。

1:23) 突然音が鳴り、驚く。試行するうちにピッチアンテナ(奏者側から見て右側の垂直な金属棒)との距離によって音高の変化が生じることに気付く。この時点では音域設定が最低音域に仕込まれており、その場合、ボリュームアンテナの操作をしなくても、一定

の距離で離れると発音しなくなる特性がある。これを利用して、フルートを構えた状態で、低周波の音を散発的に鳴らし、それとキーノイズのサウンドとを呼応させる実践に入る。

2:00) 低音域のボルタメントと、カバー・アンブシャーによるフラッターとを交互に演奏することで、テルミンの音を模倣する関係を示す。次第に自由な演奏に移行。

2:30) フルートの位置を固定することで、テルミンの音と合わせることを試みる。左手側のボリュームアンテナの操作が、フルートを構えた状態でも可能であることに気付く。

3:00) 音を合わせようとする中、どうしても微妙に動いてしまう結果、テルミンの音が動く。しかしそれに対して、フルートもスケールの音を動かすことで呼応させる演奏を思いつく。演奏は、徐々に高音域に至る。

3:50) 音域をコントロールするつまみによって、音域設定を上げる。そして、テルミンの音で旋律的な動きを実践し、それを模倣するように、フルートの音を吹く。以前の部分ではグリッサンドとスケールだったが、ここでは極力、一音一音の音高をきっちり模倣するように心がける。

5:00) カノンを形成しながら更に音域を上げていく。そして、フルートの音と、テルミンの音、さらには声も交えて、うなりを生じさせるような干渉をつくる。

6:00) 高音域からの急下行を、フルートの演奏に加え、それに伴うアクションによってテルミンの音も伴わせる。ここに来て、テルミン演奏とフルート演奏がシンクロするに至る。(フルートを離すことで音程を下げ、同時に左手をボリュームアンテナにつけることでテルミンの音を停止させるということを、一連の演奏として実践する。)

6:25) 最高音域からの下行音型とともに切迫し、テルミンのピッチアンテナにフルートがぶつかってしまうことによって、高周波のパルスが始まる。すると、会場内にスタンバイしていた3名が、防犯アラームを鳴らし、テルミンの最高音域によるパルスに音響的に

重なり合う。フルートも最高音域の連打を繰り返し、突如演奏を中断して終わる。

なお、《木道》という題名はもちろん、木ノ脇道元の名前に由来する。2020年の個展のチラシのイメージも、この題名とシンクロするように撮影された。しかしそれだけの意味ではなく、テルミンを前に、ひたすら前に向かって歩いていく求道者の姿を、木道という、一本道を進む姿に重ねたものでもある。

このように、飽くなき求道精神を持つ人物との協働により、こうして、また新たなフルート演奏の可能性を提示することに成功した。これからも、このような人物との協働を重ね、新しい音楽の可能性を拓いていきたい。

註

- (1) 当該コンサートの演目、解説、および木ノ脇道元に関する記述その他、関連する様々な内容が、こちらのブログ投稿内容から辿ることができる。<https://ameblo.jp/actionmusic/entry-12622558598.html>
(2021年11月19日最終閲覧)
- (2) 「演じる音楽」については、『国立音楽大学研究紀要』第53集(2)(2019年3月)所収の川島素晴「クラリネットにおける新しい表現」第1章、『同』第54集(2)(2020年3月)所収の川島素晴「打楽器における新しい表現」第1章、『同』第55集(2)(2021年3月)所収の川島素晴「自作《山羊座のモトハルと双子座のピペトン》解題」第1章に、連続して掲載してきたので、ここでは割愛する。また、当該内容については、以下の稿にも詳述している。：川島素晴「演じる音楽 一1」、『ExMusica』プレ創刊号(2000年3月号)。川島素晴「演じる音楽 一2」、『ExMusica』創刊号(2000年6月号)。
- (3) https://youtu.be/_CnT_-8vkuc (YouTube上で「木道」「テルミン」の2語で検索するとトップに表示される。)